

# 服のチカラ

世界を良い方向に変えていく



01 障がい者と働くということ  
ユニクロが取り組む障がい者雇用

MADE FOR ALL



# 服のチカラ 01

一見、いつもと変わらない平和な店内でも、少しだけ見方を変えてみると、服の裏側にある、さまざまな問題も見えてきます。例えば、大量に並ぶ商品のこと。商品は誰がどこでどうやって作っているの？、販売後の商品はどうなっていくの？ユニクロが、これらの問題に対してできることはごくわずかもしれません。でも一歩ずつ、世界を良い方向に変えていくためにできることから取り組み始めています。この冊子も、そうした取り組みのひとつ。まずは多くの人が知ってもらい、ともに考える仲間を増やしたいと考えています。服を通してできることは何か。服には、私たちの想像を超える「服のチカラ」があると、信じています。

今回のテーマは「障がい者雇用」です。実際にユニクロ店舗で活躍しているスタッフの視点だけではなく、同僚や外部団体、また作家の田口ランディさんにも店舗にお越し頂き、さまざまな視点から障がい者雇用について考える構成になっています。当冊子が、「知る」「考える」そして「ともに生きる」ことについて、改めて考えるきっかけになればと思っています。  
(ファーストリテイリング CSR部)



# CHANGE THE WORLD

## CONTENTS

- 04 沖縄県 ユニクロイオン那覇店 上原里恵子さん(聴覚障がい)  
文・田口ランディさん
- 08 大阪府 ユニクロ中もず店 山田哲功さん(四肢障がい)
- 10 山口県 ユニクロ宇部清水川店 三浦智恵子さん(知的障がい)
- 12 東京都 ユニクロ浅草ROX店 鈴木郷さん(高次脳機能障がい)
- 14 最大の課題は「知らない」ということ／大塚由紀子さん  
コラム／プロ車いすテニスプレーヤー 国枝慎吾さん
- 15 障がい者とともに働く



全国の店舗に広がりつつあるユニクロの障がい者雇用。日本の企業のなかでも圧倒的な雇用数を誇り、福祉の分野からも注目を集めている。作家・田口ランディが、ユニクロの障がい者雇用の原点を探して訪れた沖縄。そこで出逢ったものは？

上原さんと初めて出会った日のことは、よく覚えています。年も違う、趣味も違う、歩いてきた人生もまるで違うのに、なぜか彼女が気になりました。彼女は耳が不自由でした。みんなの声が聞こえません。でも生きることに懸命で、働くことが大好きで、ちょっとやそっとの苦勞なら笑い飛ばして生きている。そんな彼女の姿に、私は魅かれたのです。私にも生きる悩みがありました。障がい者と健常者。だけど、わかちあいたいと願いました。みんな違うのだから、あなたはあなたのままでいい。いっしょに助け合って生きていけたら……。一人ではできないことが、二人でならできました。まるで夢みたいだけれど、本当のお話です。

# そのままの あなたが、 好きです

文=田口ランディ

SPECIAL ESSAY

# 01

A OKINAWA STORY

障がいのつらさは分からないけれど、  
生きることのつらさはわかりあえる



うえはら りえこ  
上原里恵子さん  
聴覚障がい  
ユニクロイオン那覇店  
「最初はお客様が恐かった。でも儀間さんが『大丈夫、大丈夫』と何回も言ってくれて」

## 障

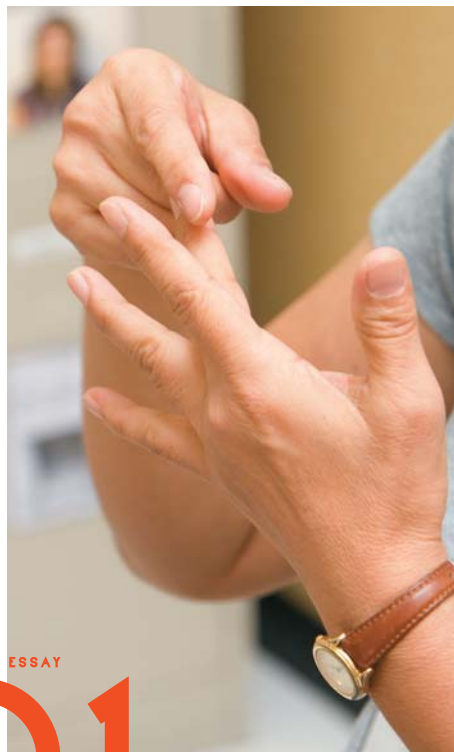
がいをもった人を雇用します。会社から「障がい者雇用のマニュアル」を渡されてびっくりしたそうです。マニュアルに書かれてあったのは形式的な文章ばかり。なんの指針もなく、障がい者を職場に丸投げするようなものでした。儀間さんは「これはなにか違うなあ」と思ったそうです。

初めての障がい者雇用で入店してきたのは、聴覚障がいをもつ上原里恵子さんでした。その上原さんの職場での相談役となったのが儀間さんでした。緊張のあまりおどおどしている上原さん。なるべく自分を前に出さないように、いつもミシンに向かって黙々と補正の仕事をする上原さんの背中を、儀間さんはとてもせつない気持ちで見守っていました。このままでは上原さんは同じ職場で働く仲間になれない。もっと、自分を表現していかねければ、みんなとうちとけられない。儀間さんはそう思ったのです。

「上原さん、もっと人前に出ようよ」そう呼びかける儀間さんに、上原さんはとまどいます。なぜならユニクロは上原さんにとって、四十歳にして初めての職場だったからです。この

職場のみんなが手話を練習する、そのことがどれほど上原さんの励みになったことか。私は受入れられている。上原さんは職場の仲間たちから、人前が出る勇気をもらったのです。どうしても引け目を感じてしまう上原さん。そんな上原さんを支えてきたのは、儀間さんの「ぜったいに上原さんといっしょに働くんぞ」という強い熱意でした。小さい時にお父さんを亡くし、がんばりやお母さんに育てられた儀間さんの心には強く「人と人は助けあって生きるもの」という思いが刻まれていたのです。

だんだんとお互いのことを語りあうようになり、儀間さんと上原さんはそれぞれの人生を知りまします。みんないろんな苦悩を生きている。障がいのつらさはわからないけれど、生きることのつらさはわかりあえる。みんな違う。だけどどこか同じ。それが人間というものなんだ。



SPECIAL ESSAY

# 01 A OKINAWA STORY



ぎま とこと  
儀間十里さん  
ユニクロ  
はにんす 宜野湾店  
「上原さんに『できない』と言われて、真剣にケンカをしたこともあります」

時期、上原さんは家庭の事情のためにどうしても働くことが必要でした。こんなご時世に障がいのある自分を雇ってくれるだけでもありがたい、そういう気持ちでした。もし、お客様の前に出て失敗したりしたら、と想像するだけで怖くなり、自分には健常者のスタッフと同じように働くなんて無理だと思いついていました。

上原さんのけなげな気持ち、儀間さんには痛いほどわかりました。寡黙にミシンに向かう背中を見ているうちに、だんだん儀間さんの考えが変わりました。「上原さんがどんなにがんばっても障がいを消すことはできない、ならば健常者の自分が変わらなければ」。儀間さんは、手話を覚えようと決めました。手話を覚えて上原さんと会話ができるようになれば、上原さんをもっと自分の気持ちを表現できるはず。休み時間に上原さんから手話を習い、朝礼で一日一つ、スタッフに紹介していきました。

儀間さんと上原さんのつながりが、次第に他のスタッフにも伝わっていきました。考えてもわからない、でも、いっしょに働いていれば身体でわかることがある、それが人間関係。いつしかみんなが手話を覚え、上原さんも「私は聴こえませんが」と、自分の障がいをお客さまに表現することができるようになりました。そうなったとき、職場は共に生きる場になりました。

「障がいがあると言えないことが一番つらいね」と上原さんは言います。障がいも自分自身の大切な一部だから。

沖縄で障がい者雇用が成功している、この情報は沖縄から全国の店舗へと伝わりました。そして社内の「障がい者雇用」のあり方が見直され、制度が変わっていきました。二人の人間の出会い、それが会社を変えてしまったのです。上原さんは今年勤続15年になります。儀間さんとはいまでも大親友です。最初に人間ありき。それがユニクロの障がい者雇用の原点でした。



上原さんと会話をするため、儀間さんは朝礼のときに一日一つ、みんなで手話を覚えることを提案した



たぐち らんてい  
田口ランディさん

作家。2000年に長編小説『コンセント』（新潮文庫）を発表し、執筆活動に入る。その後、広く人間の心の問題をテーマにした作品を発表。近刊に「生きなおすのもってこいの日」（バジリコ）がある。

## 職場は、ともに生きる場所へと 変わっていった

上原さんと儀間さんの手話でのおしゃべりは、とても「賑やか」。手話は分からなくても、楽しい話をしているのが、見ていて分かる



# O2

TETSUYOSHI YAMADA  
IN OSAKA

やまだ かつよし  
山田哲功さん  
四肢障がい 大阪府 ユニクロ中もず店

## やったるでえ

山田さんの朝は早い。そして速い。毎朝自転車で、結構なスピードを出して、誰よりも先に出勤する。山田さんが入社して12年。住宅街をぴゅーっと走り抜け爽やかに通勤する姿も、この辺りではお馴染みの朝の風景だ。

以前は、自転車の製造工場にいたが、接客がやりたくてユニクロに転職した。でも入社してすぐ、山田さんが直面したのは「遠慮の壁」だった。スタッフと話していても、相手との間に壁がある。(どう接したらいいんだろう?) 声には出さなくても、相手のとまどいが伝わってくる。仕事は覚えればいい。でも、相手と分かり合うのに、特効薬はない。その都度、対応していくことの繰り返しだ。「特別なことではないけれど、もともと人と話

すのは好きだから。休憩時間とか、自分からも話しかけるようにしましたね」  
入社当時のこうした日々を、山田さんは今でも鮮明に覚えているという。「遠慮の壁」が少しずつ低くなっていったのは、入社後3カ月を過ぎた頃だった。

「当時の店長はすごく悩んだみたいですね。今僕が考えても、それはそやな、と」  
実際にやってみてどうだったのだろうか。「めっちゃ怒られました(笑)。でも嬉しかったですよ。ユニクロは『どこまでできるんやろう』って、まずは試してくれる。当然、合格・不

合格はあるけれど、自分自身が認められている、という実感があるんです」

レジは、接客の一番の場であるとともに、お金を扱うため、お客様のチェックも当然厳しくなる。山田さんはレジを打ちながらお客様の様子について、ある統計をとったという。

「僕がレジを打ったあと、何人の人が、レシートの内容を確認するんやろうって」

結果、10人中8人がレシートを確認していた。不安そうにレシートを見直すお客様の背中を、山田さんは何人も見送った。

仕事をしていれば誰でも、くやし経験、しんどいことが当然ある。でも、そうした経験の全部を通じて、山田さん自身も変わっていった。「レジや接客をすることで、『人から見られている』ことを、自分で認めざるを得なくなつた」のだという。

「以前は、世の中は矛盾していると思っていました。ひねくれ者でしたね。でも今は、じゃあどうやって、この世の中を覆していこうかって。ね、今のかつこいいでしょ?(笑)」

### TIME SCHEDULE

山田さんの一日のスケジュール

07:15  
自転車で出勤し、  
連絡事項の確認



08:30  
レジ開け。  
各レジにおつり用のお金を仕分ける



09:00  
品出し。商品を  
ハンガーにつるし  
店頭並べる



09:15  
朝礼。昨日の売上げ報告と  
今日の売上目標を  
スタッフで共有する



10:00  
オープン。  
品出し・接客など



16:00  
資材を確認し、不足分は  
パソコンから本部に  
発注をかける

17:00  
退社。  
コンビニやスーパーで  
買い物をして帰宅

僕が打ったレシートを、  
何人が見直すんやろうって、  
数えたことがあるんです



「最初は、あまり人と話ができなかったんです。ユニクロの求人を見たときも、『接客』と書いてあったから、行く気はなかったんですよ(笑)」と、元気に話す三浦さん

SPECIAL INTERVIEW

# 03

CHIEKO MIURA  
IN YAMAGUCHI

神野洋子さん  
光栄会障害者就業・生活支援センター  
就業支援担当者

三浦智恵子さん  
知的障がい ユニクロ宇部清水川店

## お洒落な 三浦さんのこと

『ユニクロ』という会社の話を聞いたんですけど…。接客もあるみたいだし、やめておこうかなと思って」  
前職を辞めて、次の仕事を探していた三浦さん。そんな彼女から、光栄会障害者就業・生活支援センターの神野さんのところにかかってきたその日の電話は、いつもと少し違った。人一倍「働くこと」に熱意をもっている三浦さんとは思えない、ちょっと気乗りのしない声でも、ちょっと待って。神野さんは直感する。「ユニクロって、三浦さんに合っている！」  
神野さんが三浦さんと初めて会ったのは、三浦さんが前職を辞めた直後のこと。障がい者雇用を支援する地域のネットワークには、ハローワークや障がい者職業センターなどもあ

るが、神野さんが所属する障害者就業・生活支援センターは、仕事だけでなく生活支援も行うという点で他とは異なる。三浦さんにとって、一番身近な相談相手が神野さんだ。  
三浦さんは就職活動にすごく積極的だった。ただユニクロに対しては、それほど熱意やリアリティを感じていなかった。ただユニクロに比べて、三浦さんの前職は加工食品の工場。社外の人との交流はなく、仕事内容も同じ作業の繰り返し。毎日いろんなお客様が来店するユニクロとは、全く異なる環境だ。三浦さんが尻込みするのも無理はない。でも、神野さんの想いは違った。

「いちばんは、おしゃれが好きだから(笑)。好きなことなら、より前向きに仕事ができる。それに環境は変わりますが、前職で長く働いていた経験から、基本的な労働習慣や職場のマナーは完璧。ユニクロの仕事はむしろ合っていると思ったんです」  
神野さんは、一緒に就職活動を進めるなかで、しっかりと見つけていた。三浦さんの能力だけではなく、人柄や好きなこと、そして、働くことへの想いのようなもの。

「だって、仕事が無くて『気が滅入る』という話をされているときも、おしゃれだけは欠かさなくて(笑)」  
神野さんの後押しもあってユニクロに入社した三浦さん。現在は前職以上に生き生きと働いている。店舗へ様子を見に来た神野さんに



休憩時間のスタッフルーム。仕事のことも、お昼ご飯のこと、休日に行った場所のこと、いろいろなことを話す。入社する以前の三浦さんからは、想像できない

三浦さん『『ユニクロ』、どうかと思って…』  
神野さん『三浦さんにぴったりですよ!』

も「次は、ズボンの裾上げもやってみたい」と、楽しそうに話す。  
「夢や目標を持てるようになったのが、すごいと思いますね。障がいがあってもステップアップしていける、上を目指せる、そういう環境が、三浦さんには良かったんだと思います」  
三浦さん一人だったら、ユニクロでは働いていなかったかもしれない。けど神野さんが加わることで、三浦さんの夢も可能性も広がった。



商品を段ボールから出し、色別、サイズ別に整理をする品出しの作業。袋から出して、サイズを確認して、整理して…。次から次へリズムカルにこなし、あっという間にひと箱完了!

鈴木郷さん

高次脳機能障がい

ユニクロ浅草RO店

鈴木真弓さん

# ユニクロに たどり着くまで

SPECIAL INTERVIEW

# 04

GO SUZUKI  
IN ASAKUSA



鈴木真弓さんの長男、郷さんが事故にあったのは20歳の時だった。奇跡的に一命をとりとめ約1カ月後には退院。医者にも「後遺症は無い」と言われ、一見すると事故以前の状態とほぼ変わらないまでに回復した。でも、家族から見た郷さんは、明らかに以前と違っていった。今話したこともすぐ忘れる、突然キレる、暴れ出す。こうした郷さんの行動が、事故による後遺症(高次脳機能障がい)であると認定されたのは、事故後4年7カ月がたった頃だった。

ユニクロへ面接に来たのは、ようやく後遺症の認定があり、社会復帰に向けて歩き始めたばかりの時期。郷さんの状態もまだまだ落ち着いていない。「面接へは『気がすすまない』という本人を、『騙して』連れて行ったんです。入社後も3年くらいは本当に大変でした」と真弓さんは当時を振り返る。通勤も最初は不安がともなった。朝は一人で通っていたが、帰りは心配で店舗を出るときに携帯にメールを送るように言い、最寄りの駅で毎日郷さんの帰りを待っていた。また、真弓さんも随分後になって知ったそうだが、入社後2年くらいは、昼休憩中、他のスタッフとの雑談には加わらず、昼食後は男子トイレ

の個室に籠もり、休憩時間終了まで出てこなかったという。

「誰かに話しかけられたり雑談をすると、脳が疲れ切ってしまう、午後まで集中力が持たないから」と言うんです。この話を聞いた時はすごくショックでした。でも、失敗を繰り返して自分で痛い思いをしたからこそ、記憶力も少しずつ良くなっていったんだと思います」

入社当時、郷さんは仕事を覚えるためにメモをとっても、メモした紙を無くしてしまったり、メモしたこと自体を忘れてしまう状態だった。それが今では、接客もフィッシングも、一通りの仕事をこなし、障がいがあるという理由で、できないことはほとんどない。郷さんの症状は当時から想像もできないほど回復している。

「高次脳機能障がい」は、郷さんの事故当時ももちろん、今でもまだまだ知られておらず、目に見えない障がいゆえに周りからも理解されにくい。真弓さんは今、高次脳機能障がいをもっと多くの人に理解してもらうために、各地で講演活動を行っている。真弓さんが郷さんと手探りで歩いてきた道は、同じ障がいをもつ人の未来への道となり、健常者と障がい者が分かり合うための道として、広がり続けている。

## 「今、話したことも覚えていない」 理解されにくい障がいゆえのつらさ、 大変さもありません

### SNAPSHOT

鈴木さんのON TIME・OFF TIME



浅草は地元。ランチタイムはほとんど外へ食べに出る。よく行く寿司屋さんとは友達になった。行くと「郷、おまえ、いつものでいいの？」と言われるほど、馴染みのお店も



服が好き。特にインパクトが強い柄のTシャツが好き。友達には「郷だから似合うよなあ」と言われるとか



朝来てメモをするのは、その日の予算と前日の売上げ、そしてその日のシフトだけ。複雑な商品名も全部覚えている

株式会社 福祉ベンチャーパートナーズ  
代表取締役 大塚由紀子さん

## 最大の課題は「知らない」ということ

な

ぜ、障がい者の雇用率は伸びないのか。最大の理由は「知らないこと」。企業も行政も一般の生活者も、障がい者について無関心で、知らないことが多いのです。日常生活のなかで「働く障がい者」の姿を見ることは少なく、まして「障がい者から何かサービスを受ける」機会も、非常に限られています。そうした社会の中では、企業や一般の人々が「障がい者と一緒に働く」ことを身近に思えず、「戦力にならない」「働けない」と、一方的に考えてしまうのも、当然なのかもしれません。でも本当にそうなのでしょうか。ユニクロでは、障がい者も「一緒に働く仲間」として活躍しています。それができるのは、仕事内容の特性だけではなく、「正しいことを正しく行い企業価値を上げていく」という経営戦略の中に、障がい者雇用も組み込まれており、それを現

場の従業員が妥協することなく実行していった結果だと思えます。

ユニクロには、自社の取り組みを、他企業や社会にも伝えて欲しいと思います。そのためには、障がいを持ったスタッフに、バックヤードだけではなく店頭でもっともっと活躍して欲しい。「こんなに活躍している人がいる」という事実は、障がい者の家族にも勇気を与えてくれます。

社会に障がい者と触れ合う機会が増え、人々が自然に関心を持つようになっていけば、障がい者雇用の現状も、変わっていくと思います。



コンサルティング会社での勤務を経て1999年独立。障がい者の自立支援活動を行っていたヤマト運輸元会長の故小倉昌男氏と出会ったことをきっかけに、「福祉と経営の融合を通して障がい者の働く場をつくらせていきたい」と、2003年、株式会社福祉ベンチャーパートナーズを設立

## 障がい者とともに働く

ユ

ニクロは、2001年より、「全店舗に最低1名は障がい者をもった方を雇用する」という経営方針のもと、障がい者雇用に取り組んできました。今では、全国で763名(2009年8月末時点)の障がいをもったスタッフが働いています。

2001年当時の私たちには、障がい者と一緒に働くことで「効率が落ちるのではないか?」とか、「障がい者は仕事ができない」といった先入観があったかもしれません。でも、障がい者雇用を進めていくうちに、固定概念にとらわれず、できる人ができる仕事を、障がいをもったスタッフを特別扱いしない、また障がいをもったスタッフ自身にも、できること・できる

いことを表明してもらおう、といったことが、大切だと気付かされました。

現在、約9割の店舗で障がいをもったスタッフが働いていますが、ともに働くことで得られたことも多くあります。例えば店舗内には、思いやりの気持ちや、一緒に仕事をしたいという姿勢が自然に生まれてきました。ユニクロには、年齢もライフスタイルもさまざまなお客様がご来店されます。障がい者雇用を通じて生まれた配慮や細かな気遣いが、そうしたお客様へのサービス向上にも、つながっていただくと考えています。

まだ目標の全店舗での雇用には至っていませんが、これからも障がい者雇用を積極的に取り組んでまいります。

### COLUMN

プロ車いすテニスプレーヤー  
国枝慎吾さん

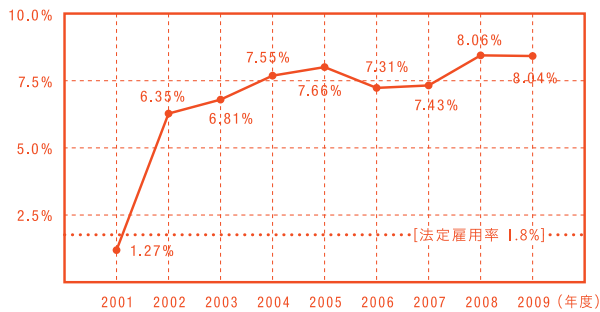
#### 「チャレンジ」は楽しい

テニスを始めた当初はその頃流行っていた漫画の影響もあって、バスケットボールの方が好きでした。でも高校で海外遠征に行き、そこで初めてプロのプレーを見たんです。技術と気迫に鳥肌が立ちました。「いつか自分もあの場で勝負したい」と思ったのを覚えています。プロになった今、これまで以上に多くの人に車いすテニスを知って欲しいと思っています。そのためにも大きな舞台でプレーし、自分が勝ち続けることで注目を集めたい。そして、子供達に夢をもってもらいたいです。障がいを持っていても、何にでもチャレンジして欲しい。チャレンジは楽しい。怖いこともあるけれど、やってみないと分からない。勇気を持って踏み出すことが大切だと思います。



9歳の時に脊髄腫瘍により車いすに。2008年北京パラリンピックでシングルス金メダル。2009年4月、日本人では初となるプロ転向を宣言。8月、ユニクロと所属契約を締結。

障がい者雇用率の推移



※数字は、2006年までは3月末、2007年からは6月1日現在のものです

スタッフの障がいの種類

